

しぶりに教育に当たりました。学部教育を担当しなかった十数年間を経て、また学部教育を担当してみますと結構楽しい。それからやっぱりそういう大きなプロジェクトの責任者から外れましたから、まだ「イスラーム地域研究」にはもちろん参加していましたが、読書をする夢が叶いました。いろいろな本を読んで、世界の歴史、地球規模の人類史というものを求めたのです。読むべきものは山のようにある。山のようにあってなかなか読み切れない。そのうちに時間が過ぎていつて定年ということになりました。定年になった途端に病気が山のように押し寄せてきました。今や人工透析を受けなければいけないという、そういう身になってしまいました。第1級身体障害者というのです。大変なことであります。完全に隠居することにいたしました。したがってついに地球規模の人類史を一冊の本で、数百ページの本で書いてみたいという夢は見果てぬまま死ぬだろうというふうに予測しております。

以上で雑多な話をいたしましたけれども、実証研究としては私の代わりに佐藤次高さんが立派な研究をしてくれました。彼に譲りまして大した仕事はしなかったわけです。しかしいろいろなことで、いろいろな議論は展開させていただいたつもりであります。以上でつたない話を終わります。どうぞご清聴ありがとうございました。

*****質疑応答*****

清水 後藤先生、ありがとうございました。久しぶりに後藤節をたっぷり堪能させていただきました。考えてみると、私もこうやって後藤先生のプロフィールというのを最初から最後まで聞かせていただいたのは初めてで、特に学生運動時代の話からというのは、いろいろああそうだったのか、とつながるところがありました。そういったものはイスラーム研究、それから自由都市メッカのような、ああいう議論につながっていくのだなという風に、非常に興味深く聞かせて頂きました。ただ今日ご参加の若いみなさん方、後藤先生はいつもこういうふうの後藤節で、自分は何のかんのと謙遜しておっしゃいますけれども、そんなことは全然ないので、後藤先生の話をお聞きにしないようお願いいたします。

さて、それでは質問に移りたいのですが、まずは私から質問させていただきます。今日のお話では、最初にマルクス主義に傾倒されていたところから展開されたのですが、マルクス主義というのはヨーロッパ中心史観であるだけでなく、日本の歴史学に対しては時代区分論というものを導入したという点で非常に大きな影響があったと思うのです。それに対して、後藤先生や佐藤先生に育てられた私たちイスラーム史の研究者は、最初からイスラームでは時代区分なんかしないよというところから始まったわけです。でも、まだ私たちの世代にも時代区分をやる人はたくさんいて、歴史学というのは時代区分論なのだというふうに公言する人もまだ同世代にいくらでもいるわけです。このあたりが、ある意味イスラーム史研究の大きな特徴かと思えますけれども、後藤先生をはじめ、先生方は、かなり意図的に戦略としてそういうものを選んでいくというふうを考えてよろしいのでしょうか。

後藤 そうですね。私の場合はかなり戦略的に選んでいたわけですが、佐藤さんは最初は一時期、イスラーム封建制度論なんていう論文を書いたりしたのです。ただ、彼もあっさりやめてしまいました。それから、イスラームの時代というのは封建制なのかというような議論もまだ多少はあったのですが、ほとんど話題にならないうちに過ぎてしまいました。ただし西アジアというかエジプトまで含めた中東というか、その地域の歴史を通観するときに、古代オリエント・エジプトからギリシア・ローマの時代を経てイスラームへ、という歴史の流れを時代区分としてどう捉えるかという議論もないのです。古代オリエント史とかエジプト史を勉強している人は、もうイスラームの時代には一切興味を持たない。それからギリシア・ローマの時代でも、ギリシア語の書物の大部分はエジプトで書かれたものなのです。だから尾崎(貴久子防衛大学校准教授)さんが紹介されているギリシア語の料理書というのは、あれは西欧の料理書ではありませんで、実はエジプトなのですよ、ほとんどが。要するにギリシア・ローマ時代の西アジアをどう位置づけるかというのも、実は議論がほとんどされてないのです。私に言わせれば、ギリシア語の文化——エジプトやシリアにあったギリシア語の文化をまるまる受け継いだのがイスラーム文明ですが、そういう議論もあまり盛んではない。だから時代区分論というのがほとんどないと同様に、イスラームを大きな歴史の流れの中にどういうふうに位置づけるかという議論もないのです。それが私は歴史学の弱点だと思っています。

清水 そうですね。やはりオリエント世界とイスラーム世界というものをどうやってつなげるか、つなげたい世界史を考えるのかというのは、大きな問題として残ったまま、誰もできないという形で残っているというふうに思います。

横内吾郎 大変興味深い話をありがとうございました。今回お話の中でできました、板垣先生が近代とイスラーム化を結び付けていらっしゃるということを、非常に不勉強でして存じませんでした。この場合の近代というのはどういうことを意味しているのか、ちょっとお伺いしたいのですが、

後藤 はい。近代というのは、もう歴史学者、我々の時代の歴史学にとってはごく自明の前提でして、だいたい早ければ16世紀ぐらいからの西欧をモデルにした社会を近代社会、近代というのです。

横内 イメージとしては例えば、ルネッサンスや宗教改革、あるいはそういったものを経て市民社会とか……？

後藤 そういったものを経て市民社会になったのが近代だ、こういう近代がないアジアは駄目だ、とこういう議論です。すべて今我々を取り巻いているいろいろなのは、すべて近代文明のおかげだという認識なのです。日本のことはどうでもいいからヨーロッパのことを研究していなければいけませんよ、という認識を経済学者や政治学者はもっている。

尾崎貴久子 先生の、個は族の中に埋没しているわけではないというお話に関してなのですが、ムハンマドの時代には一体なにかあったのでしょうか。

後藤 人間ですからね。そうそう絆を断ち切るわけにはいかない。ただどもあえて断ち切る場合もいくらでもあったということです。伝記の中では、やたらに親子の縁を切って他の集団に移ってしまうなんてことはいくらでもあるのですね。ごく自然に移ってしまうのですね。それはもちろんみんながみんなそうしているわけではないですけど。だから、ムハンマドの仲間が親子の縁を切って違うところに移ってしまうということは、まれではあるけれども空前絶後の出来事ではないのです。いくらでもそういう出来事はあるのです。

森山央朗 2つお尋ねします。1つ目は、私も歴史屋なので、時代区分論についていろいろ話したくなってしまうのですけれど。イスラーム史の中では時代区分論があまりないということをご指摘の通りだと思いますが、今年出た『史学雑誌』の「回顧と展望」の「イスラーム時代史」を担当したので、結構困ってしまったのです。やっぱりなんとなくどこかで区切ってほしいところもあって。佐藤先生なんかそれを放棄して、やっておられなかったのは、たぶん1980年代くらいまで、マルクス主義的な歴史学における時代区分論というのは土地制度の土地の所有体系の方から決められていて、その一貫性がイスラームの封建制には当てはまらないので、別に西洋モデルの古代、中世、近世、近代というのを当てはめなくてもいいのだというふうにお考えになったのだと思うのですけれども、ただやっぱり、のんびんだらりと7世紀から18世紀まで前近代イスラームとしていっしょくたにして論じていくのもどうかな、というふうに思っています。例えば支配者の変化で、トルコ・モンゴル系が少なくともマシュリクでは政権を持つようになった例えば13世紀ぐらいでいったん切ってみるとか、あるいはもう少し前でいろいろな宗派的なごちゃごちゃが収まって、スンナ派が確立した11世紀ぐらいで一回切ってみるとか、という形で色々な切り方があると思いますが、何かお考えがあればお聞かせください。2つ目の質問ですが、大学の講義で預言者伝の講義を担当していますが、受講生の一人が、後藤先生の『メッカ』を読んでよくまとめて、結構頑張っレポート書いてくれたのですが、なぜこの著者はこんなに西洋に対して敵意を持っているのかと最後に書いていましたので、それに関して少しお考えをお伺いできればと思います。

後藤 イスラーム世界の歴史の展開の中でどういうふうに時代を分けていくかという問題は、非常に大きな問題だと思います。イスラームという、宗教というか思想というか一つの価値体系というか、そういうものを軸にして眺めていけば、やっぱり11～12世紀、スンナ派というものが確立するという時代は、ある意味でイスラームが固定化していく時代だろうと思います。それまではいろいろな議論があつて柔軟であつたものが、だんだん法学体系が確立して行って、ある意味では面白くなっていく時代が変わっていく。これは、思想からみた場合の歴史の一つの大きな区切だろうと僕は思っています。そういう認識でいろいろなものを書いていた時もあります。それから政治的には、今「イスラーム世界」という考え方をしないほうがいいのだと声高に言っている羽田(正東京大学教授)さんが昔、「東方イスラーム世界」という考え方を出示して。マシュリクと言いましたけれど、そのマシュリクの中にエジプトは含めない形での東方イスラーム世界。つまり、トルコ・モンゴル系が政治的支配者になっていく、だいたい13世紀以降でしょうか。それから西欧の勢力が入ってくる18～19世紀ぐらいまでを一つの時代と考えるという。それはだけど、イスラーム世界の東のほうに限られます。西のほうまで含めたイスラーム世界というのを想定してみると、なかなかそれではうまくいかなくなってしまいます。そうすると、羽田さんみたいにイスラーム世界という枠はずせということになるわけです。大きくイスラーム世界の歴史を眺めてみれば、東の方

ではトルコ・モンゴル系の武力集団が政権を担当する、西の方では雑多人々、中でもベルベル系の人々が政権を担当するので、一応12~13世紀以前と以後では分けることができるのではないかなという、そういう見通しの下でものを書いてきたということはありません。

2つ目は、「西洋嫌い」についてのご質問でしたね。嫌いではないのですけどね。嫌いではないですけど、あまりにもみんなが西欧しか知らないというのに対しての反発なのですね。これは正直言って、高校生の時からの反発みたいなものです。旅行してみるのはそれなりに楽しいですがね。

小杉泰 2つお伺いしたいのですけれども。ひとつは、先生がおっしゃっている地球規模の人類史についてです。最近アメリカなんかでも出ているものは、全体として先生がおっしゃるように、昔は西洋だけで何も知らずに、その意味では中心史観でない。ところが最近のは、僕はちょっと西洋中心史観になってきているのではないかと思うのです。つまり、世界を全部見渡したうえで、やっぱり西洋が中心だよというようなモチーフが隠れた作品が出ている。どうも西洋中心主義みたいなもの——あるいは西欧、欧米中心主義でもいいですが——、そういうのが、グローバルな見方が広がるにしたがってむしろ強まっているのではないかというような気がするのですけれども、その辺はどうかご評価でしょうか。

後藤 2つあると思います。周辺と中心という考え方で一応世界全体を覆うふりをしながら、西欧的なものがいずれ世界を覆っていく、その歴史をずっと追っていくという、その流れは依然としてあると思いますね。一方で、実証的なレベルはまさに低いのですけれども、12~13世紀ぐらいから18世紀ぐらいまでは中国が世界の中心で、世界のGNPの半分は中国ではなかったか、そういった議論はアメリカの一部の経済学者が展開してる。まさに中心は中国にあって西欧は辺境であるという。18世紀ぐらいから段々世の中が変わってくるわけですけどね。そういう見方もアメリカに生まれているのですね。マイケル・クックの本はなかなか面白かったです。西欧中心史観は今でも根強くあるし、世界を覆う形での世界史よりまだまだ西欧中心なのが圧倒的に多いわけですけども、少し違う方向も見えているのではないかなという気が少ししているのです。

小杉 もうひとつ、「一神教革命」について伺わせてください。先生より若い我々の世代はみんな、それを下敷きにして連続性の中で議論するというのをしてきたと思うのですけれど。私の感じているところでは、なぜそうなったのかというご説明はあまりなさっていませんよね。今日も先生がおっしゃっていたように、世界を広く見ると多神信仰のほうが普通でしょう。その通りだと思うのですが、一神教革命があそこからずっと広がってきますでしょう。なぜそうなってしまうのかというあたりをですね、それを地球規模の人類史としてみた時に、どうかご評価なのかということをお聞かせいただけたらと思うのですが。

後藤 それなぜ広まったのかわかれば、僕の問題はすべて解決できると思うのですよね。要するにわからないのです。正直言って、精神的に全然違うと思います。多神信仰とキリスト教、イスラーム、もちろんユダヤ教もそうですけど。どうしてああいうものが、少数者としての信仰ならわかるのですけれども、多数派になっていったのか。今世界の半分が、だいたいもうそういう一神教の世界になっていますが、まあわからない。『預言者伝』を翻訳してしみじみ思ったのは、ムハンマドの時代の教団は一種の狂騒の中にあっただと。本当の新興宗教の教団だなという気がするのです

よね。そういう普通の状態ではない精神状態のなかに、何十名かから始まって何百名、何千名の集団ができていくのは分かるのですが、それが普遍化してしまうという社会的な現象というのはよくわからないのです。なぜだろうという気がするのですね。少数派の過激な集団として存在するなら、人類の歴史でいくらでもあると思うのですけれども。今や人類の半分ぐらいがそういう世界に生きているという、この現実がなかなかわからない。

清水 イスラームの場合に関してだけ言えば、やはり大征服ということが大きかったとは言えるわけですけど、その前のキリスト教ですよ、わからないのは。やはりローマと結びついたということが大きかったのかなと思いますけれども。

後藤 あと、ローマと結びつく前に、政治が結びつかなければならないほどキリスト教が普及したということですよ。

清水 そうですね。そこは確かによくわかります。どうでしょうお若い方、めったにない機会ですので何かしら。

渡邊駿 本日のお話で、歴史の比較の参照軸としてのイスラーム世界史、というお話があったと思いますけれども、我々の世代ですと、高校の世界史教育で、一通りのイスラームに関する教育を受けていて、それで実際私も、同じ世代の友達と話していて一定程度的話は通じるのかなという感覚を受けているのです。実際日本での一般の教育という上で、こうした世界史に対する見方というもの、先生はどのように評価していらっしゃるのでしょうか。

後藤 私は、2年前に辞めましたけれども、東京書籍という会社の『世界史B』という高校の歴史の教科書の執筆者の一人なのです。これがもう何十年やってきただろう、ともかく相当やってきました。30年以上やってきましたかね。世界史の教科書というのは、少しずつページ数全体は増えていくのですけれども基本は変わらない。その中でイスラーム世界の歴史のページ数をいかに増やすかということを考えていて、いつも大喧嘩するのです。イスラーム世界史の記述が増えたのは、その喧嘩の成果なのです、実は。総ページ数が変わらないですから減らすのは当然、ヨーロッパ史と中国史です。ヨーロッパ史と中国史をいかに減らしてイスラーム世界史のページ数を確保するかと、当然最近では東南アジアのうるさいのが入ってきてページ数を確保したり、南アジアが確保したり。いろいろところで喧嘩をしながらページ数を確保していく。30年私がいる間に5倍ぐらいに増えてます、イスラーム世界史は。先ほど私がちょっと言いましたように、私たちの世代はもう70歳代になって、ぼちぼち何人か仲間が——佐藤さんが亡くなったり、この間は湯川さんが亡くなったり——、仲間が亡くなっていくのですけれども、我々の上の世代がいたから我々が教えを乞うことができたのです。しかし上の世代は先生がいない時代です。つまり上の世代は独自に切り開いてきた。嶋田襄平先生とか前嶋信次先生とか井筒俊彦先生とか、そういう人たちの世代が最初の世代。その世代の弟子たちが我々の世代。我々の世代がかなり前の世代に比べれば層が厚くなった。少しずついわば、いろんな社会に対して発言権を得るようになってきた。我々は大変恵まれて、先ほどから名前を挙げていた何人かの人たちがみな大学で教えるようになって、それぞれまた次の世代を育てていく。そうやって我々の次の世代がもっとぐっと分厚くなってきたのです。それは日

本社会全体から見ればささやかなものですが、我々の世界だけから見れば急速に成長している学問分野です。その繁栄がある程度、高校の教科書にも反映しているし、日本の世論形成にも反映している。それから、イスラームのイの字は知らなくても新聞記事なんかいくらでも書けた、政治家もアラブのアの字も知らなくても政治ができた時代から、石油が絡んでそういうことを知らなければいけない時代に1970年代から入ってしまった。そういうことが非常に大きな要因になって、今日の我々の世界があるのだと思っています。しかし、日本の世論というものをリードしている経済学とか社会学とか政治学の学者たちとか、そういうものの影響下にあるマスコミ関係の報道の担い手が、どれだけ正確な知識を持っているかという点に非に疑わしいと僕は思っています。

清水 ちょっと今のことで私のほうからお伺いしたいのですが、高校の教科書の中でイスラーム世界だけが「イスラーム世界の歴史」になっているという問題。これは羽田先生も前から言っていますけれども。戦前から回教圏という概念があって、回教圏からイスラーム世界へと名前が変わる、という流れがあるということが知られていますけれども、それが高校の教科書の中に導入されていって、西アジアではなくてイスラーム世界という区分になったというのは、これはやはり前嶋先生たちの世代の人たちの何らかの影響だと考えてよろしいでしょうか。

後藤 いやこれは非常に俗的な話ですけど、古代オリエント・エジプト史を西洋史が取り込んでしまったのですね。あれは西洋史なのです、日本の学会の常識では。でもイスラームの時代になると、西洋史ではなくなってしまうのです。しかし伝統的な東洋史でもない。だからイスラーム世界史になってしまうのです、中東の古代史を西洋史(西欧中心の歴史)から切り離す必要があるのですね。それなら、ギリシア・ローマだってみんな西洋史から切り離さなければいけないのです。それが歴史認識全体としてできていない。したがって、古代オリエントからギリシア・ローマからイスラームへという歴史の流れが、世界史理解の前提になってない。西洋史の前提としての古代オリエント・エジプト文明があって、それからギリシア・ローマがあって、それでボンと西欧にすっ飛ばすという歴史認識は、今でも崩れていないのです。それが基本なのですね。日本のありとあらゆる学問の前提になっているのです。世界史の教科書の前提でもある。それは相当頑張っても修正するのは駄目なのですね。

東長靖 先生はイスラームの初期の歴史を専門になさっていらっしゃるわけですが、そのきっかけはなんだったのでしょうか。それと、初期を研究なさったからこそ地球規模の人類史に対してこういう見方ができたとかいうことがありましたら教えていただきたいのですけれども。

後藤 初期史を選んだのはたまたまに過ぎないですね。別にどこでもよかったわけですが。別にイスラームでもなくてもよかった。先ほど言いましたようにたまたま嶋田先生と小高先生に出会うことがあったということで始めて、卒論でたまたま一番楽しそうだったからメッカを選んで。そういうたまたまの延長でしかないのです。イスラーム世界史を私なりに理解すれば、古代オリエント・エジプト文明を受け継いだのがギリシア文明——ギリシア語の世界です。ギリシア語の世界の中心はあくまでもエジプトやシリアにあって、決して今のギリシア共和国にあったわけではない。今のエジプト、シリアそれからトルコにあったのですね。ローマの時代もローマ帝国の経済的文化的な中心はやはりギリシア語世界にあった——、それを受け継いでいるのがイスラーム世界なのだと。

したがってある時点まで、僕に言わせればだいたい9～10世紀ぐらいまで、西アジア、東地中海を中心とするイスラーム世界というのが世界の最先端地域であったと認識してるのです。それが大きな地球規模の世界史の僕の枠組みですね。それに対して10世紀ぐらいから、急速に稲作地帯が勃興してきたというのが、私の理解です。決して中国が、とは言わない。中国の北のほうは駄目です、政治的には強くても。稲作地帯、揚子江流域以南が急速に経済力を増してきて、僕の言葉で言えば文明の練度が高くなった。世界の博物館を回ってみますと、ある時代までの西アジアのいろいろな工芸品は圧倒的な水準の高さなのです。10～11世紀ぐらいから、宋代の陶磁器にしても工芸品にしても、南中国のものが世界の美術館の宝物です。もうそれだけ文明の練度が違ってきたのだ。ところが稲作地帯というのは、国家を作るとか商業を盛んにするというソフトの技術をあまり発展させてこなかったのです。そこにムスリム商人がどっと入っていったというのが、私なりの地球規模の人類史の一コマなのです。そんなことを考えているのですけども、なかなかそういうことを実証的に説くなんてことはできっこないですし、なかなか大風呂敷を広げるのも、かなりたくさん本を読まなくてはいけないので、なかなかできないと、そんなだらしないことで、結局見果てぬ夢になっているわけです。

上原健太郎 先生は冒頭で、イスラーム世界というものをあえて定義しないとおっしゃいましたが、現代の文脈で先生がイスラーム世界をどのようにお考えになっているのかというのをぜひ。

後藤 それもまた、いくら時間があっても足りないし、きちんと文献を読んでいるわけでもないですけど。私の性格として、いろいろな学会に出てはいろいろな機会でいろいろな若い人の話を聞いた耳学問の知識ですけど。イスラーム教徒が多い社会は世界で連動しています、現在でも。決して一つ一つが孤立してないのです。いろいろな形のウラマーが現在でも多くいて、また必ずしも伝統的な法学を勉強したウラマーだけではなくて、いわゆる近代教育をうけた医者とか学校の教師とかそういう人たちが、それなりにイスラームについてそれぞれ独自の考えを持っていて、しかも一人ではなくていろいろな形でつながっているのです。したがって政治運動にしても社会運動にしても、今の近代国家の、それぞれ二百いくつある国家の枠組みで見えていくと、全然見えなくなってしまう部分をたくさん抱えているというのが、イスラーム教徒が多い社会の共通の現象だろうと思います。そういう力というものを、宗教とか一つの思想体系とか価値体系とか、そういうもの——つまりイスラームが現在でも失わずにあるのだ、というのが私の認識です。決して全部が仲が良いというわけではないです。日本でも、インドネシア系のモスクにいくとインドネシア人しかあまりいないですし、パキスタン系のモスクに行くとパキスタン系の人しかあまりいないとか、いろいろなことはあることはあります。しかしモスクはモスクですね、やっぱり。

池端路子 私は学部時代に歴史学にいまして、そこから地域研究の大学院に入ったのですが、歴史学と地域研究のつながりみたいなものを、どのように考えていらっしゃるか、ぜひお聞かせいただきたいと思います。

後藤 最大の難問ですね。先ほど国立中東研究所をつくろうという動きが始まって地域研究という言葉にはじめて僕は接したと申しましたが、そのときから大問題です、地域研究と歴史学というのは。梅棹さんたちの頭の中には、歴史研究の否定として地域研究があるのですね。歴史研究はいば

りすぎると。もっと露骨に言えば、大学の歴史研究のポストを削って地域研究に回せという、そういう要求も背後にあったのです。その場合の歴史研究というのは私が何回か言いましたように、史料に基づく実証的な研究ですね。したがって細かい。たとえば中国史なんて言うのは、史料と称するものを山のように広げてばあっと読んでいくということをしなないと、一人前と認められないのです。そういう研究で地域の歴史が本当にわかるのかという疑問を、地域研究者と称する人たちが共通して持っているのです。歴史研究に対する批判なわけ。それに対して歴史研究者の方は、地域研究と言ったって史料に基づかない空論に過ぎないではないかという批判をする。当然歴史研究といってもいろいろな人がいますが、史料に基づく手堅い研究をしている日本史研究者、西洋史研究者、中国史研究者が圧倒的に中心ですから、その人たちからみると、地域研究というのは胡散臭い、なんとも言えないいい加減な学問だなという印象を持っている。なかなか相容れない側面が非常に強いのです。佐藤さんがイスラーム地域研究の責任者になるときに、彼もさんざん考えたのです。『一編の古文書からでも地域研究はできる』という有名な言葉をつくったわけですけども。そこは、歴史学者としての佐藤さんの一種の妥協点だったというふうに、僕はそういう気がしているのです。